

源氏續本 桐壺の巻一





大和回建樹大人校訂

源氏讀本 相壺の巻 一

東京

跡見女学校藏版



おほむね

作意 源氏物語は。或帝の皇子に源氏の君といふおはして。世に榮え給ふさまを。作れる物語なり。

作者と時代 源氏物語の作者紫式部は。藤原爲時の娘。藤原宣孝の妻にて。狭衣を作りし大貳三位の母なり。早く夫を失ひて。一條天皇の御后上東門院に仕へ申したる事ありき。此物語は夫に別れて後に出で來りしものならんといふ。

巻の名 巻の数は五十四あり。名づけて源氏五十四帖といふ。左の如し。

- |     |     |    |    |     |     |
|-----|-----|----|----|-----|-----|
| 桐壺  | 篔簹木 | 空蟬 | 夕顔 | 若紫  | 末摘花 |
| 紅葉賀 | 花宴  | 葵  | 榊  | 花散里 | 須磨  |
| 明石  | 漣標  | 蓬生 | 關屋 | 繪合  | 松風  |



薄雲	朝顔	乙女	玉葛	初音	胡蝶
螢	常夏	篝火	野分	御幸	藤袴
檜柱	梅枝	藤裏葉	若菜 <sub>下上</sub>	柏木	横笛
鈴虫	夕霧	御法	幻	(雲隠)	匂宮
紅梅	竹川	橋姫	椎本	總角	早蕨
宿木	東屋	浮船	蜻蛉	手習	夢浮橋

この内より撰びたる巻を源氏讀本としたり。

註釋 古より此書の註釋は多けれど。完全したるものは。北村季吟の湖月抄に及ぶものなし。加茂真淵の新釋は上木せずして止みぬ。僧契沖の源註拾遺。本居宣長の玉の小櫛などは。必ず見るべし。萩原廣道の評釋は極めてよきものなれど。初のかた數卷ならでは脱稿せられざりしこそ惜しけれ。

### 桐壺の卷大要

源氏の君誕生前より十二歳までの事なり。此巻に出でたる人々は。

- 桐壺の帝
  - 弘徽殿の女御
  - 桐壺更衣
  - 藤壺の女御
  - 一の皇子
  - 源氏の君
  - 左大臣
  - 藏人の少將
  - 葵の上
- 源氏の君の御父。
  - 一の皇子の御母。
  - 源氏の君の御母。
  - 先帝の四の宮。
  - 源氏の君異腹の御兄。
  - 源氏の君の御舅。
  - 左大臣の子息。
  - 少將の妹。源氏の奥方。



右大臣  
四の君

弘徽殿の御父。  
右大臣の娘。少將の妻。

桐壺更衣の母  
ゆげひの命婦

内侍のすけ

右大辨

大藏卿

源氏讀本壹 桐壺の卷

大和田建樹校訂

いづれのおほん時にか。女御更衣あまたさぶらひ給ひける中に。  
いごやんごこなきよはにはあらぬが。すぐれて時めき給ふありけり。  
初より我はご思ひあがり給へる御方々。めざましきものにおごしめそねみ給ふ。同じほど。それより下臈の更衣たちは。まして安からず。朝夕の宮仕につけても人の心を動かさし。恨をおふつもりにやありけん。いごあつしくなりゆき。物心ばそげに里がちなるを。いよくあかずあはれなるものにおもほして。人のそしりをもえ憚らせ給はず。世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部うへびごなごもあいなく目をそばめつし。いごまばゆき人の御おぼえなり。



もろこしにも。かゝる事のおこりにこそ。世も亂れあしかりけれ  
ご。やうく天の下にもあぢきなう。人のもてなやみぐさになり  
て。楊貴妃のためしも引き出でつべうなりゆくに。いごはしたな  
き事おほかれご。かたじけなき御心ばへのたぐひなきをたのみに  
て。交らひ給ふ。

父の大納言はなくなりて。母北の方なんいにしへの人のよしある  
にて。親うち具しさしあたりて。世のおぼえ花やかなる御方々に  
も劣らず。何事の儀式をもてなし給ひけれご。とりたてはか  
くしき御うしろみしなれば。事ある時は。猶よりごころなく  
心細げなり。

さきの世にも御契や深かりけん。世になく清らなる玉のをのこみ  
こさへ生れ給ひぬ。いつしかご心もこながらせ給ひて。いそぎ參  
らせて御覽するに。めづらかなるちこの御かたちなり。一のみこ

は右大臣の女御の御腹にて。よせおもく疑なきまうけの君ご。世  
にもてかしづき聞ゆれご。この御にほひには並び給ふべくもあら  
ざりければ。大方のやんごこなき御おもひにて。この君をば私物  
におもほしかしづき給ふ事限なし。

初よりおしなべての上宮仕ゑ給ふべきにはあらざりき。おほ  
えやんごこなく。上ずめかしけれご。わりなくまつはさせ給ふあ  
まりに。さるべき御あそびの折々。何事にもゆるある事のみし  
くには。まづまうのぼらせ給ふ。或時には大殿ごもり過してや  
がてさぶらはせ給ひなご。あながちに御前去らずもてなさせ給ひ  
し程に。おのづから輕き方にも見えしを。このみこ生れ給ひて後  
は。いご心ごにおもほしおきてたれば。坊にもようせずは。こ  
のみこの居給ふべきなんめりご。一のみこの女御はおほし疑へ  
り。



人より先に参り給ひて。やんごなき御思ひなべてならず。みこ  
たちなごもおはしませば。この御方の御いさめをのみぞ。猶わづ  
らはしく。心苦しう思ひ聞えさせ給ひける。  
かしこき御蔭をば頼み聞えながら。おごしめ疵を求め給ふ人は多  
く。我身はかよわく。物はかなき有様にて。なか／＼なる物思を  
ぞま給ふ。御局は桐壺なり。あまたの御方々をすぎさせ給ひつ  
ゝ。ひまなき御前わたりに。人の御心を盡し給ふも。げにこころ  
りご見えたり。まうのぼり給ふにも。あまりうち志きる折々は。  
打橋わたごの。こゝかしこの道にあやしきわざを志つゝ。御おく  
りむかへの人の衣の裾たへがたう。まさなき事ごもあり。又ある  
時はえさらぬめたうの戸をさしこめ。こなたかなた心をあはせ  
て。はしたなめわづらはせ給ふ時も多かり。事に觸れて。數知ら  
ず苦しき事のみまされば。いごいたう思ひわびたるを。いごゝあ

はれご御覽じて。後涼殿にもごよりさぶらひ給ふ更衣の曹子を。  
外に移させ給ひて。上局にたまはず。その恨ましてやらん方な  
し。

このみこ三つになり給ふ年。御袴着の事。一の宮の奉りしに劣ら  
ず。くらづかさ納殿の物を盡して。いみじうせさせ給ふ。それに  
つけても世のそしりのみ多かれど。このみこのおよずけもておは  
する。御かたち心ばへ。ありがたく珍しきまで見え給ふを。えそ  
ねみ給はず。物の心知り給ふ人は。かゝる人も世に出でおはする  
ものなりけりこ。あさましきまで目を驚かし給ふ。

その年の夏。御息所はかなき心ちにわづらひて。まかんでなんご  
し給ふを。いごま更に許させ給はず。年ごろ常のあつしきになり  
給へれば。御目馴れて。猶しばし試みよこのみのたまはずるに。  
日々におもり給ひて。唯五日六日の程にいごよわうなれば。母君



なくく奏してまかんでさせ奉り給ふ。かゝる折にもあるまじき  
耻もこそ。心づかひして。みこをば留め奉りて。忍びてぞ出で  
給ふ。恨あればさのみもえ留めさせ給はず。御覽じだに送らぬお  
ぼつかなさを。いふ方なく思さる。いごにほひやかに美しげなる  
人の。いたう面瘦せて。いごあはれご物を思ひ志みながら。言に  
出でても聞えやらず。あるかなさかに消え入りつゝ物し給ふを。  
御覽するに。さしかた行く末おぼしわかれず。萬の事をなくく  
契りの給はすれど。御いらへもえ聞え給はず。まみなごもいごた  
ゆげにて。いごごなよく。われかのけしきにて臥したれば。  
いかさまにかご思しめしまごはる。手ぐるまの宣旨などの給はせ  
ても。又入らせ給ひては。更にゆるさせ給はず。限あらん道にも  
おくれさきだゝじご。契らせ給ひけるを。さりごもうち捨てゝは  
え行きやらじご。のたまはするを。女もいごいみじご見奉りて。

かぎりごて別るゝ道のかなしきに。いかまほしきは命なりけ  
り。いごかく思う給へましかばご。息も絶えつゝ。聞えまほしげ  
なるごはありげなれど。いご苦しげにたゆげなれば。かくなが  
らごもかくもならんを御覽じはてんご。思しめすに。けふはじむ  
べき祈ごも。さるべき人々うけたまはれる。今宵よりご聞えいそ  
がせば。わりなくおもほしながら。まかんでさせ給ひつ。  
御胸のみつごふたがりて。つゆまごろまれず。あかしかねさせ給  
ふ。御使の行きかふ程もなきに。猶いぶせさを限なくのたまはせ  
つるを。夜中うち過ぐる程になん。絶えはて給ひぬること。泣き  
騒げば。御使もいごあへなくて。歸り参りぬ。聞し召す御心まご  
ひ。何事も思しめしわかれず。こもりおはします。みこはかくて  
もいご御覽ぜまほしけれご。かゝる程にさぶらひ給ふれいなき事  
なれば。まかんで給ひなんごす。何事かあらんごもおもほしたら



ず。さぶらふ人々の泣きまごひ。うへも御涙のひまなく流れおは  
しますを。怪しご見奉り給へるを。よろしき事にだに。かゝる別  
れの悲しからぬはなきわざなるを。ましてあはれにいふかひな  
し。

限あれば例の作法にをさめ奉るを。母北の方。同じ烟にも上りな  
んご泣きこがれ給ひて。御送の女房の車に慕ひ乗り給ひて。愛宕  
ごいふ所に。いごいかめしうその作法したるに。おはしつきたる  
心地。いかばかりかはありけん。空しき御からをみる。猶お  
はするものご思ふがいごかひなければ。灰になり給はんを見奉り  
て。今はなき人ごひたふるに思ひなりなんご。さかしうのたまひ  
つれご。車よりおちぬへうまごひ給へば。さは思ひつかしご。人  
々もてわづらひ聞ゆ。内より御使あり。三位のくらの贈り給ふよ  
し。勅使來てその宣命讀むなん。悲しき事なりける。女御ごだに

古歌  
ある時はあ  
りのすさび  
にいくかり  
さなくぞ  
人は戀し  
りけるか

いはせずなりぬるが。あかず口惜しう思さるれば。今ひごきざみ  
の位をだに。贈らせ給ふなりけり。これにつけても憎み給ふ人  
々多かり。物思ひ知り給ふは。さまかたちなごのめでたかりし  
事。心ばせのなだらかにめやすく。にくみがたかりし事なご。今  
ぞおぼし出づる。さまあしき御もてなしゆるこそ。すげなうそね  
み給ひしか。人がらのあはれに情ありし御心を。うへの女房なご  
も戀ひ忍びあへり。なくてぞこはかゝる折にやご見えたり。  
はかなく日ごろ過ぎて。後のわざなごにも。こまかにごぶらはせ  
給ふ。程ふるまゝにせんかたなく悲しうおぼさるゝに。御方々の  
御このるなごも絶えてし給はず。唯涙にひちて明かし暮らさせ給  
へば。見奉る人さへ露けき秋なり。なき跡まで人の胸あくまじか  
りける人の御おぼえかなごぞ。弘徽殿なごには。猶ゆるしなうの  
たまひける。一の宮を見奉らせ給ふにも。若宮の御戀しさのみお



もほし出でつゝ。親しき女房御乳母などを遣しつゝ。有様を聞き召す。

野分だちて俄にはださむき夕暮の程。常よりもおぼし出づる事多くて。靴負の命婦といふをつかはす。夕月夜のをかしき程に出だし立てさせ給うて。やがてながめおはします。かうやうの折は。御遊なごせさせ給ひしに。心こなる物の音をかきならし。はかなく聞え出づる言の葉も。人よりは異なりしけはひかたちの。面影につこそひておぼさるゝも。やみのうつゝには猶劣りけり。命婦かしこにまかんでつきて。門ひき入るゝよりけはひあはれなり。やもめずみなれど。人ひごりの御かしづきに。さかくつくるひ立てゝ。めやすき程にて過し給へるを。やみにくくて伏し沈み給へる程に。草も高くなり。野分にいさゞ荒れたる心地して。月かげばかりぞ。八重葎にもさはらずさし入りたる。

古歌  
うば玉のや  
みのうつゝ  
はさだかな  
る夢にいく  
らもまさら  
ざりけり

南おもてにおろして。母君もごみにえ物ものたまはず。今までごまり侍るがいさうきを。かゝる御使の蓬生の露分け入り給ふにつけても。耻かしうなんごて。げにえたふまじくない給ふ。参りてはいさゞ心苦しう。こゝろぎもゝ盡くるやうになんご。内侍のすけの奏し給ひしを。物思ひ給へ知らぬ心地にも。げにこそいご忍び難う侍りけれごて。やゝためらひて仰事傳へ聞ゆ。

暫しは夢かこのみたごられしを。やうゝ思ひまづまるにしも。さむべき方なく堪へ難きは。いかにすべきわざにかごも。問ひ合はすべき人だになきを。忍びては参り給ひなんや。若宮のいごおぼつかなく。露けき中に過し給ふも心苦しう思さるゝを。ごく参り給へなご。はかゞしうものたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝ。かつは人も心よわく見奉るらんご。おぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心苦しさに。うけたまはりもはてぬやうにて



なん。まかんで侍りぬるごて。御文奉る。

目も見え侍らぬに。かくかしこき仰事を光にてなんごて見給ふ。

程へばすこしうちまざるゝ事もやご。待ち過す月日に添へて。い

ご忍び難きは。わりなきわざになん。いわけなき人もいかにご思

ひやりつゝ。諸共にはくゝまぬおぼつかなきを。今は猶昔のかた

みになすらへて物し給へなご。こまやかに書かせ給へり。

宮城野のつゆふきむすぶ風の音に。小萩がもこをおもひこそ

やれ。ごあれご。え見給ひはてず。命長さのいごつらう思う給へ

ゑらるゝに。松の思はんことだにはづかしう思う給へ侍れば。百

敷に行きかひ侍らん事は。ましていごはごかり多くなん。かしこ

き仰事を度々承りながら。みづからはえなん思ひ給へたつまじ

き。若宮はいかにおもほしゝるにか。参り給はん事をのみなん思

しいそぐめれば。こごわりに悲しう見奉り侍るなご。内々に思う

六帖  
いかにして  
ありとしら  
れじ高砂の  
松の思はん  
し事もはづ  
か

給へるさまを奏し給へ。ゆゝしき身に侍れば。かくておはします  
もいまゝしうかたじけなく。なごのたまふ。

宮はおほごのごもりにけり。見奉りてくはしく御有様も奏し侍ら

まほしきを。待ちおはしますらんを。夜ふけ侍りぬへしごて急

ぐ。くれまごふ心のやみも堪へ難きかたはしをだに。はるくばか

りに聞えまほしう侍るを。わたくしにも心のごかにまかんでたま

へ。年ごろ嬉しくおもだゝしきついでにのみ立ちより給ひしもの

を。かゝる御消息にて見奉る。かへすゝつれなき命にも侍る

かな。生れし時より思ふ心ありし人にて。故大納言今はごなるま

で。唯この人の宮仕のほい必ず遂げさせ奉れ。わがなくなりぬご

て。くちをしう思ひくづほるなご。かへすゝいさめ置かれ侍り

しかば。はかゝしうゝしろみ思ふ人なきまじらひは。なかく

なるべき事ご思う給へながら。唯かの遺言を違へじごばかりに。



出だし立て侍りしを。身にあまるまでの御志の。萬にかたじけなきに。人げなき耻をかくしつゝ。交らひ給ふめりつるを。人のそねみ深く積り。安からぬ事多くなりそひ侍るに。よこさまなるやうにて。つひにかくなり侍りぬれば。かへりてはつらくなん。かこき御志を思う給へられ侍る。これもわりなき心のやみになんこ。いひもやらずむせかへり給ふ程に。夜も更けぬ。うへもまかなん。我御心ながら。あながちに人め驚くばかり思されしも。長かるまじきなりけりこ。今はつらかりける人の契になん。世にいさゝかも人の心をまげたる事はあらじと思ふを。唯この人ゆゑにて。あまたさるまじき人の恨を負ひしはてはは。かう打ち捨てられて心をさめん方なきに。いさゞ人わろくかたくなになりはつるも。さきの世ゆかしうなんこ。うち返しつゝ。御志ほたれがちにのみおはしますこ。語りて盡せず。なくく夜いた

う更けぬれば。今宵過ぎず御かへり奏せんこ。急ぎまゐる。月は入方の空きようすみ渡れるに。風いさ涼しく吹きて。草むらの虫の聲々もよほしがほなるも。いさ立ちはなれにくき草のもこなり。

鈴虫のこゑのかぎりをつくしても。長き夜あかずふるなみだかな。えも乗りやらず。

いさゞしく蟲の音まげきあさちふに。露おきそふる雲のうへ人。かごこも聞えつべくなん。こいはせ給ふ。をかしき御贈物なごあるべき折にもあらねば。唯かの御かたみにこて。かゝるやうもやご残しおき給へりける。御装束ひこくたり。みぐしあげの調度めく物。添へ給ふ。若き人々悲しき事は更にもいはず。うちわたりを朝夕にならひて。いささうくしく。うへの御有様なご思ひ出で聞ゆれば。こく参り給はんこをそゞのかし聞ゆれご。か



くいまゝしき身の添ひ奉らんも。いご人ぎょうかるべし。又見奉らで暫しもあらんは。いごうしろめたう思ひ聞え給ひて。すがくごもえ参らせ奉り給はぬなりけり。

命婦はまだ大殿ごもらせ給はざりけるを。あはれに見奉る。御前の壺前裁のいごおもしろき盛なるを。御覽するやうにて。忍びやかに。心にくき限の女房四五人さぶらはせ給ひて。御物語せさせ給ふなりけり。このごろ明暮御覽する長恨歌の御繪。亭子院のかゝせ給ひて。伊勢貫之によませ給へる大和言の葉をも。もろこしのうたをも。唯そのすちをぞまくらごごにせさせ給ふ。

いごこまやかに有様を問はせ給ふ。あはれなりつること忍びやかに奏す。御かへり御覽すれば。いごもかしこきはおきごころも侍らず。かゝる仰事につけても。かきくらすみだりごゝちになん。

荒き風ふせぎし蔭の枯れしより。小萩がうへぞあづごゝろな

き。なごやうに亂りがはしきを。心をさめざりける程ご。御覽じゆるすべし。いごかうしも見えじご。思しあづむれご。更にいご忍びあへさせ給はず。御覽じはじめし年月の事さへかきあつめ。萬に思し續けられて。時の間もおぼつかなかりしを。かくても月日は經にけりご。あさましう思し召さる。故大納言の遺言あやまだず。宮仕のほい深く物したりしよろこびは。かひあるさまにこそそ思ひ渡りつれ。いふかひなしやごうち給はせて。いごあはれに思しやる。かくてもおのづから若宮なご生ひ出で給はゞ。さるべきついでもありなん。命長くごこそ思ひ念ぜめ。なご宣はず。かのおくりもの御覽ぜさす。なき人のすみか尋ね出でたりけん。あるしのかんざしならましかばご。おもほすもいごかひなし。尋ねゆくまぼろしもがなつてにても。魂のありかをそこさるべく。繪にかける楊貴妃のかたちは。いみじき繪師といへご



も。筆かぎりありければ。いごにほひなし。大液の芙蓉未央の柳も。けにかよひたりしかたちを。唐めいたるよそひはうるはしうこそありけめ。なつかしうらうたげなりしを思し出づるに。花鳥の色にも音にもよそふべき方ぞなき。朝夕のここくさに。はねをならべ枝をかはさんご。契らせ給ひしに。かなはざりける命のほごぞ。盡せずうらめしき。

風の音蟲のねにつけて。物のみ悲しう思さるゝに。弘徽殿には久しう上の御局にもまうのぼり給はず。月のおもしろきに。夜更くるまで遊をぞし給ふなる。いごすさまじうものしご聞し召す。この頃の御けしきを見奉るうへびご女房などは。かたはらいたしご聞きけり。いごおしたち。かごくしき所ものし給ふ御方にて。ここにもあらず思しけちて。もてなし給ふなるべし。月も入りぬ。

雲のうへもなみだにくるゝ秋の月。いかですむらん淺茅生の宿。おぼしやりつゝ。燈をかゝげつくして起きおはします。右近のつかさのこのあまうしの聲聞ゆるは。丑になりぬるなるべし。人目を思して。よるのおごごに入らせ給ひても。まごろませ給ふ事かたし。

朝に起きさせ給ふごても。明くるも知らでご思し出づるにも。猶あさまつりごごは怠らせ給ひぬべかんめり。物なごも聞しめさず。あさがれひのけしきばかりふれさせ給ひて。大床子のおものなごは。いご遙に思し召したれば。陪膳にさぶらふかぎりは。心苦しき御けしきを見奉りなげく。すべて近うさぶらふかぎりは。をごこ女いごわりなきわざかなご。言ひ合はせつゝ歎く。さるべき契こそはおはしましけめ。そこらの人のそしりうらみをも憚らせ給はず。この御事にふれたる事をば。道理をも失はせ給ひ。今



はたかく。世の中の事をも思しすてたるやうになり行くは。いご  
たいくしきわざなり。ひごのみかごのためしまで引き出でつ  
ゝ。さゝめき歎きけり。

月日經て若宮まり給ひぬ。いごこの世のものならず。清らに  
およすけ給へれば。いごゆしう思したり。明くる年の春坊定  
まり給ふにも。いごひきこさまほしう思せご。御うしろみすべき  
人もなく。又世のうけひくまじき事なれば。なか／＼危く思し憚  
りて。色にも出ださせ給はずなりぬるを。さばかり思したれご。  
限こそありけれ。世の人も聞え。女御も御心おちる給ひぬ。  
かの御おば北の方。なぐさむ方なく思しづみて。おはすらん  
所にだに尋ね行かんご。願ひ給ひしゝるしにや。つひにうせ給ひ  
ぬれば。又これを悲しみ思す事限なし。みこ六つになり給ふ年な  
れば。この度は思し知りて戀ひ泣き給ふ。年ごろ馴れむつび聞え

給へるを。見奉り置かなしびをなん。かへすぐのたまひけ  
る。

今は内へのみさぶらひ給ふ。七つになり給へば。ふみはじめなご  
せさせ給ひて。世にしらすさごうかしこくおはすれば。あまりに  
おそろしきまで御覽ず。今は誰もくえにくみ給はじ。母君なく  
てだにらうたうし給へて。弘徽殿なごにも渡らせ給ふ御供に  
は。やがて御簾の内に入れ奉り給ふ。いみじきものゝふあだがた  
きなりごも。見てはうち笑まれぬべきさまのし給へれば。えさし  
放ち給はず。をんなみこたち一ごころ。この御腹におはしませご。  
なすらひ給ふべきだにぞなかりける。御かたぐもかくれ給は  
ず。今よりなまめかしう耻かしげにおはすれば。いごをかしう。  
うちこけぬあそびぐさに。誰もく思ひ聞え給へり。わざこの御  
學問はさるものにて。琴笛の音にも雲井を響かし。すべていひつ



ゞけばこそくしう。うたてぞなりぬべき人の御様なりける。そのころ高麗人の参れるが中に。かしこき相人ありけるを聞き召して。宮の内に召さん事は。宇多の帝の御いましめあれば。いみじう忍びて。このみこを鴻臚館につかはしたり。御うしろみだちてつかうまつる右大辨の。子のやうに思はせて。ゐて奉る。相人驚きて。あまたしび傾きあやしぶ。國の親となりて帝王のかみなき位にのぼるべき相おはします人の。そなたにて見れば亂れ憂ふる事やあらん。おほやけのかためとなりて天の下を輔くる方にて見れば。又その相違ふべしといふ。辨もいござえかしこき博士にて。いひかはしたる言ごもなん。いご興ありける。ふみなご作りかはして。けふあす歸り去りなんとするに。かくありがたき人いたいめんしたるよろこび。かへりては悲しかるべき心ばへを。おもしろく作りたるに。みこもいごあはれなる句を作り給へるを。

限なうめで奉りて。いみじきおくりものごもを捧げ奉る。東宮のおほちおごどなど。いかなる事にかご思し疑ひてなんありける。帝かしこき御心に。やまごさうをおほせて。思しよりにけるすぢなれば。今までこの君を。みこにもなさせ給はざりけるを。相人は誠にかしこかりけりご思しあはせて。無品親王の外戚のよせなきにてはたゞよはさじ。我御代もいご定めなきを。たゞうごにておほやけの御うしろみをするなん。ゆくさきもたのもしげなる事ご思し定めて。いよく道々のさえをならはせ給ふ。きはここにかしこくて。たゞうごにはいごあたらしけれご。みこごなり給ひなば。世のうたがひ負ひ給ひぬべく物し給へば。宿曜のかしこき道の人に考へさせ給ふにも。同じさまに申せば。源氏になし奉るべく思しおきてたり。年月に添へて。御息所の御事をおぼし忘るゝ折なし。慰むやこさ



るべき人々を参らせ給へご。なづらひに思さるゝだにいご難き世  
かなご。うごまじうのみよろづに思しなりぬるに。せんだいの四  
の宮の。御かたちすぐれ給へる聞え高くおはします。母后よにな  
くかしづき聞え給ふを。うへにさぶらふ内侍のすけは。せんだい  
の御時の人にて。かの宮にも親しう参り馴れたりければ。いわけ  
なくおはしましゝ時より見奉り。今もほの見奉りて。うせ給ひに  
し御息所の御かたちに似給へる人を。三代の宮仕に傳はりぬる  
に。え見たてまつりつけぬに。後の宮の姫宮こそ。いごようおほ  
えて生ひ出でさせ給へりけれ。ありがたきかたち人になんご。奏  
しけるに。誠にやご御心ごまりて。ねんごころに聞えさせ給ひけり。  
母后。あなおそろしや。東宮の女御のいごさがなくて。桐壺の更  
衣の。あらはにはかなくもてなされしためしもゆゝしうご。思し  
つゝみて。すがくしうも思したゝざりける程に。后もうせ給ひ

ぬ。心ばそきさまにておはしますに。唯我女みこたちご同じつら  
に思ひ聞えんご。いごねんごころに聞えさせ給ふ。さぶらふ人々御  
うしろみたち。御せうごの兵部卿のみこなご。かく心ばそくてお  
はしまさんよりは。内ずみせさせ給ひて。御心も慰むべく思しな  
りて。参らせ奉り給へり。  
藤壺ごきこゆ。げに御かたちありさま。怪しきまでぞおぼえ給へ  
る。これは人の御きはまさりて思ひなしめでたく。人もえおごし  
め聞え給はねば。うけばりてあかぬごごなし。かれは人もゆるし  
聞えざりしに。御志のあやくなりしぞかし。思しまぎるゝごは  
なけれど。おのづから御心うつろひて。こよなく思し慰むやうな  
るも。あわれなるわざなりけり。  
源氏の君は御あたり去り給はぬを。ましてしげく渡らせ給ふ御  
方は。えはちあへ給はず。いづれの御方も。われ人に劣らんごお



ばえたるやはある。ごりくゝにいごめでたけれど。うちおこなび給へるに。いご若う美しげにて。せちに隠れ給へど。おのづから漏り見奉る。母御息所はかげだにおぼえ給はぬを。いごよう似給へりご。内侍のすけの聞えけるを。わかき御心地に。いごあはれご思ひ聞え給ひて。常に参らまほしう。なづさひ見奉らばやごおぼえ給ふ。

うへも限なき御思ひどちにて。なうごみ給ひそ。怪しくよそへ聞えつべき心地なんする。なめしご思さでらうたう志給へ。つらつきまみなどはいごよう似たりしゆゑ。通ひて見え給ふも似げなからずなんなど。聞えつけ給へれば。をさなごゝちにも。はかなき花紅葉につけても志を見え奉り。こよなう心よせ聞え給へれば。弘徽殿の女御。又この宮ごも御中そばくしきゆる。うちそへてもごよりのにくさも立ち出で。物しご思したり。

世にたくひなしご見奉り給ひ。名高うおはする宮の御かたちにも。猶にほはしきは譬へん方なく。美しげなるを。世の人ひかる君ご聞ゆ。藤壺ならび給ひて。御おぼえもごりくゝなれば。かゞやく日の宮ご聞ゆ。

この君の御童姿いごかへまうく思せど。十二にて御元服し給ふ。あたちおぼしいごなみて。限ある事に事を添へさせ給ふ。一年の東宮の御元服。南殿にてありし儀式のよそほしかりし御ひゞきに。おごさせ給はず。所々の饗など。くらづかさ穀倉院など。おほやけごごに仕う奉れる。おろそかなる事もごご。ごりわき仰事ありて。清らを盡して仕う奉れり。

おはします殿のひんがしの廂。東向に倚子立て、冠者の御座。引入のおごごの御座御前にあり。申の時にぞ源氏参り給ふ。みづらゆひ給へるつらつき顔のにはひ。さまかへ給はん事をしげなり。



大藏卿藏人仕う奉る。いと清らなる御ぐしをそぐ程。心苦しげなるを。うへは御息所の見ましかばご思し出づるに。堪へ難きを。心強く念じかへさせ給ふ。

かうぶりし給ひて御やすみ所にまかんで給ひて。みぞ奉りかへて。おりて拜し奉り給ふさまに。皆人涙おこし給ふ。帝はたましてえ忍びあへ給はず。思しまぎるゝ折もありつるを。昔の事こりかへし悲しくおぼさる。いとかうきびわなる程は。あげおこりやご疑はしく思されつるを。あさましうゝつくしげさ添ひ給へり。

引入のおごごのみこばらに。唯一人かしづき給ふ御むすめ。東宮よりも御けしきあるを。思しわづらふ事ありけるは。この君に奉らんの御心なりけり。内にも御けしき給はらせ給ひければ。さらばこの折の御うしろみなかんめるを。そひふしにもご催させ給ひければ。さおぼしたり。

さぶらひにまかんで給ひて。人々大御酒などまあるほど。みこたちの御座の末に。源氏着き給へり。おごごけしきばみ聞え給ふ事あれど。物のつゝましき程にて。ごもかくもあへたらひ聞え給はず。御前より内侍宣旨うけたまはり傳へて。おごご参り給ふへきめしあれば。参り給ふ。御祿のもの。うへの命婦取りてたまふ。白き大褂にみぞ一くだり。例の事なり。御盃のついでに。

いとさなき初もごゆひに長き世を。ちぎる心はむすびこめつや。御心ばへありて驚かさせ給ふ。

結びつるこゝろも深きもごゆひに。こきむらさきの色しあせずは。ご奏して。長はしよりおりて舞踏たまふ。左のつかさの御馬。藏人所の鷹するて賜はり給ふ。

御はしのもごにみこたち上達部つらねて。祿どもあなぐに賜はり給ふ。その日の御前の折櫃物。籠物など。右大辨なん承りて仕



う奉らせける。屯食祿の辛櫃どもなど。所せきまで。東宮の御元服の折にも數まされり。なか／＼限もなくいかめしうなん。その夜おごごの御里に。源氏の君まかんでさせ給ふ。さほう世に珍しきまで。もてかしづき聞え給へり。いごきびわにておはしたるを。ゆゝしう／＼つくしご思ひ聞え給へり。女君は少し過し給へるほどに。いご若うおはすれば。似げなく耻かしごおぼいたり。このおごごの御おぼえいごやんごなきに。母宮内のひごつ后腹になんおはしければ。いつかたにつけても物あざやかなるに。この君さへかくおはし添ひぬれば。東宮の御おほちにて。つひに世の中をあり給ふべき。右のおごごの御いきほひは。物にもあらずおされ給へり。御子どもあまた腹々に物し給ふ。宮の御腹は藏人の少將にて。いご若うをかしきを。右のおごごの御中はいごよからねど。え見過し給はで。かしづき給ふ四の君にあはせ奉り。劣

らずもてかしづきたるは。あらまほしき御あはひどもになん。源氏の君は。うへの常に召しまつはせば。心安く里住もえ給はず。心の内には。唯藤壺の御有様をたぐひなしご思ひ聞えて。さやうならん人をこそ見め。似るものなくもおはしけるかな。おほいごの君。いごをかしげにかしづかれたる人ごは見ゆれど。心にもつかずおぼえ給ひて。をさなきほどの御ひごへ心にかゝりて。いご苦しきまでぞおはしける。おごなになり給ひて後は。ありしやうに御簾の内にも入れ給はず。御遊の折々。琴笛の音に聞き通ひ。ほのかなる御聲をなくさめにて。内住のみ好ましうおぼえ給ふ。五日六日さぶらひ給ひて。おほいどのに二日三日など。たえ／＼にまかんで給へど。只今は幼き御程に罪なくおぼしなして。いごなみかしづき聞え給ふ。御方々の人々。世の中におしなべたらぬをえりごのへすく



りてさぶらはせ給ふ。御心につくべき御遊をし。おふなく思し  
いたづく。

内にはもこの淑景舎を御曹子にて。母御息所の御方々の人々。ま  
かんで散らすさぶらはせ給ふ。里の殿はすりしきたくみづかさ  
に  
宣旨下りて。になう改め作らせ給ふ。もとのこたち山のたゞずま  
ひ。おもしろき所なるを。池の心廣く志なして。めでたく作りの  
よし。かゝる所に思ふやうならん人をすゑて住まばやこのみ。  
歎かしくおぼしわたる。

光君といふ名は。こまうどのめで聞えてつけ奉りけるこそ。言ひ  
傳へたるこなん。

源氏讀本 一終

語釋

○まうけの君<sup>頁三</sup>……皇太子。○坊<sup>頁三</sup>……これも皇太子なり。東宮坊  
の略。○曹子<sup>頁五</sup>……局に同じ。○上局<sup>頁五</sup>……常の局の外に帝の御前近  
く別に設けたる休息所。○くらづかさ<sup>頁五</sup>……内藏寮にて納殿ご共  
に御寶物など納め置かるゝ所。○愛宕<sup>頁八</sup>……おたぎと讀むべし。火  
葬場のある地。○三位のくらゐ<sup>頁八</sup>……女御相當の位。更衣は四位な  
り。○門ひき入るゝ<sup>頁一〇</sup>……車を門より引き入るゝなり。○ひこく  
だり<sup>頁一五</sup>……一そろひなり。○みぐしあげの調度<sup>頁一五</sup>……かんざしな  
ごの事。○壺前栽<sup>頁一六</sup>……草花植ゑたる庭。○長恨歌<sup>頁一六</sup>……唐の白  
居易の作にて立宗皇帝の楊貴妃に死別し給ひし事をあはれに作れ  
る詩。○なき人のすみか云々<sup>頁一七</sup>……すなはち長恨歌中の古事。立  
宗皇帝御悲しみの餘り方士に命じて楊貴妃の魂のゆくへを尋ねし  
め給ひしに。仙境なる蓬萊宮に至りてありしを知り得て行きて逢



ひたりこいふ話。○しるしのかんざし頁一七……楊貴妃の魂に逢ひたる證として方士が携へ歸り帝に示したるもの。○まぼろし頁一七……幻術士。すなはち方士の事。○大液の芙蓉未央の柳頁一八……大液池の蓮花未央宮の青柳なり。長恨歌に。歸來池苑皆依舊。大液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉。對此如何不淚垂。こ見ゆ。○はねをならへ枝をかはさん頁一八……長恨歌に。在天願作比翼鳥、在地願爲連理枝。こ帝貴妃と誓ひ給ひし事あり。○こもし火をかゝげつくして頁一九……夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未爲眠。こ長恨歌にあり。○右近のつかさのこのあまうし頁一九……右近衛府の宿直武官が各その名を名乗る事。丑の一刻にあり。○あさがれ頁一九……朝の御飯にて女房の陪膳するもの。○大床子のおもの頁一九……大床子所こいふに机二つ立て、召しあがる正式の御飯。殿上人の陪膳するもの。○ふみはじめ頁二一……御讀書始なり。○鴻臚館頁二二……外蕃の人を滯

留せしむる所。○宿曜頁二三……すくえうと讀む。二十八宿九曜の行度を見て人の運命を占ふ術。○南殿頁二一……紫宸殿。○所々の饗頁二七……北山折抄。所々饗膳之事。王卿。廳。女房。別納。殿上。藏人所。兩亮。諸大夫二百膳とある類なり。○穀倉院頁二七……無主没官の田稅諸莊の物銅錢の類を納め置く所。○引入のおと頁二七……初めて冠を召さする役の大臣。いはゆる烏帽子親。○みづら頁二七……もとごりなり。○大藏卿藏人頁二八……藏人はみぐしあげの誤字ならんとの説あり。みぐしあげの御髪を結び上ぐる役。○長はし頁二九……清涼殿より紫宸殿に通ふ廊にある階段。東庭へ下るゝ所。○折櫃物籠頁二九……折に入りたる物と籠に入りたるものと。菓子くだものゝ類。○屯食頁三〇……どんじきと讀む。強飯を握り固めて鳥の玉子の形にしたるもの。下々に賜はる料なり。○淑景舎頁三三……しげいさと讀む。桐壺の本名。



明治三十四年三月廿九日印刷  
明治三十四年四月一日發行

定價 金十八錢

校訂者

東京市牛込區東橫町十九番地

大和田建樹

發行者

東京市神田區裏神保町六番地

上原才一

發行所

東京市神田區裏神保町六番地

上原書店

印刷者

東京市本郷區丸山福山町六番地

水谷景長

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

合資博進社工場

大賣捌

東京市日本橋通三丁目  
全京橋區南傳馬町三丁目  
大阪市備後町四丁目  
京都市東洞院三條東へ入

林 平次郎  
目 黒支店  
吉岡平助  
村上勘兵衛

名古屋市本町三丁目 川瀨代助  
仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助  
長野市大門町 西澤喜太郎  
松本本町三丁目 高美書店





